『卒都婆小町』

― 上演詞章 ―

詞章

1【習ノ次第】

〈次第〉

シテ〽身は浮草を誘ふ水、身は浮草を誘う水、なきこそ悲しかりけれ

〈サシ〉

シテ〽哀れやげに古へは、僑慢最も甚だしう、翡翠の髪伏は婀娜と嫋やかにして、楊柳の春の風に靡くがごとし、また鶯舌の囀りは、露を含める糸萩の、詞言ばかりに散りそむる花よりもなほめづらしや、今は民間賤の女にさえ穢まれ、諸人に恥をさらし、嬉しからぬ月日身に積もつて、百歳の姥となりて候

〈下ゲ歌〉

シテ〽都は人目つつましや、もしもそれとか夕言まぐれ

〈上ゲ歌〉

シテ〽月もろともに出でて行く、月もろともに出でて行く、雲居百敷や、大内山の山守も、かかる憂き身はよも咎めじ、木隠れて由なや、鳥羽の恋塚秋の山、月の桂の川瀬舟、漕ぎ行く人は誰やらん、漕ぎ行く人は誰やらん

〈着キゼリフ〉

シテ「あまりに苦しう候ふほどに、これなる朽木に腰をかけて休まばやと思い候

〈名ノリ〉

ワキ「これは高野住山の沙門にて候、霊仏霊社参詣のため、只今都へ上り候

〈着キゼリフ〉

ワキ「急ぎ候ほどにこれははや津の国阿部野の松原とかや申し候、この所に暫く休らはうずるにて候

2

〈問答〉

ワキ「なうなう是なる乞丐人御覧候へ、あら浅ましやとやつれ果てて候や、腰をかけたるは卒都婆にては候はぬか、強化して退けばやと思ひ候

ワキツレ「尤もにて候

〈掛ケ合〉

ワキ「いかに是なる乞丐人、おことの腰かけたるは、忝なくも仏体色相の卒都婆にてはなきか、そこ立ち退きて余の所に休み候へ

シテ「仏体色相の忝きとは宣へども、これほどに文字も見えず、刻める像もなし、ただ朽木とこそ見えたれ

ワキ〽たとひ深山の朽木なりとも、花咲きし木は隠れなし、況や仏体に刻める木、などその證なかるべき

シテ〽我も賤しき埋木なれども、心の花のまだあれば、手向けになどかならざらん、さて仏体たるべき謂はれはいかに

ワキツレ〽それ卒都婆は金剛薩埵、仮に出化して、三摩耶形を行う給ふ

シテ「行ひなせる形はいかに

ワキ〽地水火風空

シテ〽五大五輪は人の体、何しに隔てあるべきぞ

ワキツレ〽形はそれに違はずとも、心功徳は変はるべし

シテ「さて卒都婆の功徳は〽いかに

ワキ〽一見卒都婆永離三悪道

シテ〽一念発起菩提心、それもいかでか劣るべき

ワキツレ〽菩提心あらばなど浮世をば厭はぬぞ

シテ〽姿が世をも厭はばこそ心こそ厭へ

ワキ〽心なき身なればこそ、仏体をば知らざるらめ

シテ「仏体と知ればこそ卒都婆には近づきたれ

ワキツレ〽さらばなど礼をばなさで敷きたるぞ

シテ〽とても臥したるこの卒都婆、我も休むは苦しいか

ワキ〽それは順縁に外れたり

シテ「逆縁なりと浮かむべし

ワキツレ〽提婆が悪も

シテ「観音の慈悲

ワキ〽槃特が愚痴も

シテ「文殊の〽知恵

ワキツレ〽悪と云ふも

シテ〽善なり

ワキ〽煩悩と云ふも

シテ〽菩提なり

ワキツレ〽菩提もと

シテ〽植木にあらず

ワキ〽明鏡また

シテ〽台になし

〈歌〉

地〽げに本来一物なき時は仏も衆生も隔てなし

〈上ゲ歌〉

地〽もとより愚痴の凡夫を、救はんための方便の、深き誓ひの願なれば、逆縁なりと浮かむべしと、懇ろに申せば、真に悟れる非人なりとて僧は頭を地につけて、三度礼し給へば

シテ〽我はこの時力を得、なほ戯れの歌を詠む

〈下ノ詠〉

シテ〽極楽の内ならばこそ悪しからめ、外は何卒都婆かは苦しかるべき

〈歌〉

地〽むつかしの僧の教化や、むつかしの僧の教化や

3

〈問答〉

ワキ「これは心ある乞丐人にて候、古の名を尋ねばやと思ひ候、いかに乞丐人、古はいかなる者ぞ、名を御名のり候へ

シテ「恥づかしながら名を名のり候ふべし

〈名ノリグリ〉

シテ〽これは出羽の郡司小野の良実が女、小野の小町がなれる果てにてさむらふなり

〈サシ〉

ワキ、ワキツレ〽いたはしやな小町は、さも古は優女にて、花の貌輝き、桂の黛青うして、白粉を絶えさず、羅稜の衣多うして桂殿の間に余りしぞかし

シテ〽歌を詠み詩を作り

地〽酔ひを勧むる觴は、漢月袖に静かなり

現代語訳

1 **老女、僧の登場**

老女は美貌にめぐまれた昔の日々に思いをはせ、また落魄して百歳の老婆になってしまったと述懐しつつ、人目が多い都を出て行こうとする。

老女　わたくしは浮草のように落ちぶれた境遇にありますが、浮草なら水が誘ってくれるのに、悲しいことに、いまはわたくしを誘ってくれる人もいません。

ああ、まったく、昔のわたくしは、その美しさゆえに、たいへんな驕りの持ち主でした。髪は美しい翡翠の簪で飾り、それはさながら柳が春の風になびくようにたおやかでした。また、声は鶯の鳴き声のようであり、露に濡れた糸萩の花がほんの少し散りはじめたより風情があったものです。しかし、いまは世の賤しい女にまでうとまれ、多くの人に恥をさらして、物憂き年月を送っているうちに、百歳の老婆となってしまいました。

都は人目がはばかられるものです。「ひょっとしたら、あれは小町では」と、いつ言われるか心配で、それで夕暮れの月といっしょに、都を出ることにしたのです。都人も、このような落ちぶれた者など見咎めはしないでしょうから、身を隠したりする必要もありません。しかし、道中の鳥羽の恋塚や秋の山が木に隠れて見えないのは残念なことです。また、月に照らされた桂川を川瀬舟で行く風流な人は誰なのか、気になります。

2 **老女、僧の応対**

僧が卒都婆に腰掛けている老女を咎めて、卒都婆が仏体である理由、卒都婆の功徳などについての問答となり、やがて老女による「煩悩即菩提」という思想（一如観）が示されて、論争は老女の勝利に終わり、それまで立っていた僧と従僧は地に伏して老女を拝する。

僧　やや、ここにいる乞食が腰掛けているのは、まちがいなく卒都婆です。ただちに教化して退かそうと思う。

おい、そこの乞食よ。そなたが腰掛けているのは、もったいなくも、仏のお姿を表わした卒都婆ではないか。そこを立って別の所で休みなさい。

老女　もったいない仏のお姿と言われましたが、こんなふうに文字も消え、刻まれている五大の形も見えません。ただの朽木としか見えませんが。

僧　たとえ、深山の朽木であっても、花が咲いた木はすぐにそれとわかるもの。まして、これは仏のお姿を刻んだ木。どうして、それとわからないことがあろうか。

老女　わたくしは賤しい老残の身ですが、風情を解する心の花はまだ残っているので、こうして腰掛けていることも、多少は仏への手向けになると思うのです。ところでうかがいますが、卒都婆を仏体とするその理由は何ですか。

従僧　そもそも、卒都婆は、金剛薩埵が仮に現われて大日如来の誓願を形に表わされたものだ。

老女　その表わされたという形は、どのようなものですか。

僧　地、水、火、風、空の五大だ。

老女　地、水、火、風、空の五大や五輪といえば、それは人間の身体と同じです。ならば、どうして、わたくしが卒都婆に腰を掛けているのがいけないのでしょうか。

従僧　形は同じでも、心のあり方や功徳の有無が人とは違うのだ。

老女　では、お尋ねします。その卒都婆の功徳というのは何ですか。

僧　「一見卒都婆、永離三悪道」といって、ひとたび卒都婆を拝したなら、永遠に三悪道から脱却できることである。

老女　しかし、「一念を発して菩提心を起こせば、百千塔を造立するのにもまさる」といわれています。そのようなわたくしの菩提心は卒都婆の功徳に劣るとは思われません。

従僧　菩提心があると言うなら、どうしてこの憂き世を厭って仏道に入らないのか。

老女　姿で世を厭うわけではありません。心が問題で、心で厭うのです。

僧　その心がない不届き者だからこそ、仏体だと知らずに、卒都婆に腰掛けたのであろう。

老女　いや、仏体と知っていたからこそ、卒都婆に近づいたのです。

従僧　それなら、どうして礼拝をしないで、腰掛けたりしたのか。

老女　もともと、この卒都婆は倒れて横になっていたもの。そこに休息したのは不都合でしょうか。

僧　それは仏道に入るための善行とはとても言えない。

老女　たとえ悪事を行っても、往生は可能です。

従僧　提婆達多のような悪人でもか。

老女　はい、慈悲深い観音と同じように。

僧　周利槃特のような愚人でもか。

老女　は、文殊のような賢者と変わることはありません。

従僧　それでは、悪とは。

老女　悪はすなわち善です。

僧　では、煩悩とは。

老女　煩悩はすなわち菩提です。

従僧　しかし、菩提は菩提、煩悩は煩悩ではないか。

老女　いやいや、菩提というのは、そもそもこれという実体があるものではありません。

僧　それでは、真如も同じなのか。

老女　そうです。真如もまた、これという実体があるものではありません。

そもそも、元来、この世は無一物なのですから、仏と衆生の区別などはないのです。

もともと、諸仏によるありがたい誓願は、愚かな凡夫を救おうとするための手段なのですから、たとえ悪事を行った者であっても成仏できるのです。

と、老女が詳しく説いたので、僧は、「まことに深く悟った老女だ」と言って、頭を地につけて、三度、老女に礼拝された。それで、老女は得意になって、戯れに、同じことを歌で詠んだのだった。

老女　これを歌で表現するならば、「極楽の内で卒都婆に腰掛けたらとんでもないことですが、このように極楽の外の卒都婆なら少しもさしつかえはないはずです」となるでしょうか。それにしても、僧の仏法理解はあまりに形式にとらわれすぎています。

3 **老女、僧の応対**

老女は小野小町であることを明かし、現在の老残の姿を恥じるうち、突然、何者かの霊に取り憑かれる。

僧　ところで、あなたはどういうお人なのですか。名前をお名乗りください。

老女　恥ずかしながら、わが名を名乗ることにしましょう。

わたくしは、出羽の郡司であった小野良実の娘で、落魄した小野の小町です。

僧、従僧　これはおいたわしい。小町といえば、昔はたいへん高貴なお方で、花のような顔は輝やくばかり、眉は月のように清らかで、いつも白粉を絶やすことなく、また、所持している薄衣は美しい家には入りきらないほど多くあったとか。

〈下ゲ歌〉
地〽まこと優なる有様のいつそのほどに引きかへて
〈上ゲ歌〉
地〽頭には、霜蓬を戴き、嬋娟たりし両鬢も、膚に悴けて墨乱れ、宛嚬たりし雙蛾も、遠山の色を失ふ
〈下ゲ歌〉
地〽百歳に、一歳足らぬ九十九髪、かかる思ひは有明の影恥づかしき我が身かな
〈ロンギ〉
地〽頸にかけたる袋にはいかなる物を入れたるぞ
シテ〽今日も命は知らねども、明日の飢ゑを助けんと、粟豆の乾飯を袋に入れて持ちたるよ
地〽後に負へる袋には
シテ〽垢膩の垢づける衣あり
地〽臂にかけたる簀には
シテ〽白黒の慈姑あり
地〽破れ簑
シテ〽破れ笠
地〽面ばかりも隠さねば
シテ〽まして霜雪雨露
地〽涙をだにも抑ふべき、袂も袖もあらばこそ、今は路頭にさそらひ、往き来の人に物を乞ふ、乞ひ得ぬ時は悪心、また狂乱の心つきて、声変はりけしからず

老女　また、歌も詠み、詩も作り、七夕の宴席で人に盃を勧める袖には、天の川の月が映るような風情で、ほんとうに優雅なありさまだったのですが、いつのまにか、昔とはうって変わったありさまとなってしまいました。
その結果、頭髪は霜を置いた蓬のように白くなり、蟬の羽根のように艶やかだった左右の鬢もちぢれてしまい、三日月のように美しかった二つの眉も、遠山のようだった美しさが失せてしまいました。
百年に一年足らない九十九歳という年齢となって、髪も海草のようになり、苦しい思いばかりをしています。このような姿が月光に照らされたりするのは、恥ずかしいかぎりです。
僧　首に掛けている袋には、何が入っているのですか。
老女　今日の命さえわからないのですが、明日の食べる物に困らないようにと、乾燥させた粟や豆を袋に入れているのです。
僧　背負っている袋の物は何ですか。
老女　垢やあぶらで汚れた衣です。
僧　臂に掛けている籠には何が。
老女　白と黒の慈姑です。
僧　簑は破れていますね。
老女　笠も破れています。
僧　顔すら隠せない。
老女　まして、雨露霜雪も凌げず、涙を抑えることさえできません。いまはこうして路頭にさすらって、往き来の人に物乞いをしているしまつ。物乞いがうまくゆかないときには、腹を立てて悪態をついたりしているのです。
と、そう言ったかと思うと、老女は狂乱状態となって、その声も異様な声に変わったのだった。

4

〈問答〉
シテ〽なう物賜べなう「お僧なる
ワキ「何事ぞ
シテ「小町が許へ通はうよなう
ワキ「おことこそ小町よ、何として現なき事をば宣ふぞ
シテ「いや小町といふ人は、あまりに色が深うて、あなたの玉章こなたの文へかき昏れて降る五月雨の「虚言なりとも、一度の返事も無うて、〽今百歳になるが報うて、あら人恋しや、あら人恋しや
ワキ「人恋しいとは、さて只今はいかやうなる者の憑き添ひたるぞ
シテ「小町に心を懸けし人は多き中にも、殊に思ひ深草の四位の少将の
〈歌〉
地〽恨みの数の廻り来て車の榻に通はん、日は何時ぞ夕暮れ、月こそ友よ通ひ路の、関守はありとも留るまじや出で立たん
〈物着〉

4　老女の憑依

四位少将の霊に取り憑かれた老女は、着衣を替えて、かつての「百夜通い」を再現しようとする。

老女　もうし、何かお恵みください。もうし、お僧殿。
僧　いったい、どうしたというのか。
老女　小町のもとへ通うことにしよう。
僧　そなたが小町ではないか。どうして正気とは思えぬことを言うのか。
老女　いやいや、小町という人は、たいへんな美貌の持ち主で、多くの貴公子からたくさんの恋文が届けられたのですが、たとえ本心ではないものでも、誰にも返事をしませんでした。百歳になったいま、その報いがきて、いまは人恋しくてなりません。ああ、人恋しいこと。
僧　人恋しいなどと言うのは、いったい誰の霊が取り憑いたのか。
老女　小町に思いを寄せた人はたくさんいたが、その思いがとりわけ深かったのが四位少将でした。
その四位少将の積もる恨みが、いまよみがえってきました。さあ、小町の車の榻に通うことにしよう。
時刻はいつごろかと思えば、はや夕暮れ時です。では、月を友として通うことにしよう。途中で関守に止められても、あきらめることはすまい。さあ、出掛けよう。

5

〈歌〉
シテ〽浄衣の袴かいとつて
地〽浄衣の袴かいとつて、立烏帽子を風折り狩衣の袖をうち被いて、人目忍ぶの通ひ路の、月にも行く闇にも行く、雨の夜も風の夜も、木の葉の時雨雪深し
〈□〉
シテ〽軒の玉水、とくとくと

〈歌〉
地〽行きては帰り、帰りては行き一夜二夜三夜四夜、七夜八夜九夜、豊の明の節会にも、逢はでぞ通ふ鶏の、時をも変へず暁の、榻のはしがき百夜までと通ひ往て九十九夜になりたり
シテ〽あら苦し目まひや
地〽胸苦しやと悲しみて、一夜を待たで死したりし、深草の少将の、その怨念が憑き添ひて、かやうに物には狂はするぞや

6

〈キリ〉
地〽これに就けても後の世を、願ふぞ真なりける、砂を塔と重ねて黄金の膚こまやかに、花を仏に手向けつつ、悟りの道に入らうよ、悟りの道に入らうよ

衣の袖をかざして、人目を忍んで、月の夜も闇の夜も、雨の夜も風の夜も、こうして小町のもとへ通ったのです。そうして、季節も木の葉が散る時雨どきから雪深い季節へと移ってゆきました。
やがて、雪解けの雨垂れが軒から落ちる季節になっても、せっせと精を出して、行きつ戻りつし、一夜、二夜、三夜、四夜・・・七夜、八夜、九夜、十夜と数えながら通ったのですが、小町には会わず、わたくしは鶏のように、いつも時間どおり、明け方に榻の端に通った回数を書き記したのでした。しかし、なんとか百夜まではと思って通ってゆき、とうとう九十九夜になったのです。
ところが、九十九夜まで通ったところで、「ああ、胸が苦しい。目が回る。胸が苦しい」と叫んで、あと一夜を残して、少将は死んでしまったのです。その深草少将の恨みが憑き祟って、このように狂乱させているのです。

6　終曲

小町は憑依から覚め、後世を思って、仏道に入ることを心に誓い、合掌して留め。

老女　こんな目にあうにつけ、後世を願うのが正しい道なのだと思います。童が砂を集めて仏塔を作って遊ぶように、み仏の黄金の肌を磨き、み仏に花を手向けて供養を重ね、仏道に入ろうと思います。

『卒都婆小町』鑑賞のために ― 詞章・現代語訳についてのメモ

◆演出の都合により詞章に省略・異同がある場合がございます。
◆【習ノ次第】は人物の登場楽（出囃子）です。
◆詞章冒頭の〈上ゲ歌〉〈下ゲ歌〉〈一セイ〉〈サシ〉〈問答〉などは、当該箇所の曲節の名称です。
　また、〈□〉は名称をつけるほどではない節を仮にこの形で表したものです。
◆詞章で〽が付された箇所は韻文のフシ（節）、「が付された箇所は散文のコトバ（詞）です。
◆掛詞と認められる箇所にはもうひとつの意味を左肩に漢字で小さく記しています。
◆詞章に「地」とされている部分は、戯曲上は大別して、
　①シテのセリフ
　②ワキのセリフ
　③叙事文（小説で言えば「地の文」）
　の三種があるので、現代語訳にさいしては、そのいずれか判断して訳しています。
　また、③叙事文の箇所の現代語訳は二字下げにしてあります。

今回は、「一度之次第」という小書（演出）で上演するため、通常の「卒都婆小町」では上演される、冒頭のワキ・ワキツレの登場が一部カットされています。以下に、通常の「卒都婆小町」での、冒頭の詞章を掲載します。

〈次第〉
ワキ、ワキツレ〽山は浅きに隠れ家の、山は浅きに隠れ家の、深きや心なるらん
〈名ノリ〉
ワキ「これは高野住山の沙門にて候、霊仏霊社参詣のため、只今都へ上り候
〈サシ〉
ワキ〽それ前仏は既に去り、後仏は未だ世に出でず
ワキ、ワキツレ〽夢の中間に生まれ来て、何を現と思ふべき、たまたま受け難き人身を受け、遇ひ難き如来の教法に遇ふ事、これぞ悟りの種となると
〈下ゲ歌〉
ワキ、ワキツレ〽思ふ心も一重なる、墨の衣に身をなして
〈上ゲ歌〉
ワキ、ワキツレ〽生まれぬ前の身を知れば、生まれぬ前の身を知れば、憐れむべき親もなし、親のなければ我が為に、心を留むる子もなし、千里を行くも遠からず、野に臥し山に泊まるこそ、げに捨つる身の習ひなれ、げに捨つる身の習ひなれ。
〈着キゼリフ〉
ワキ「急ぎ候ほどにこれははや津の国阿部野の松原とかや申し候、この所に暫く休らはうずるにて候